

2010年4月22日
 森林塾青水
 事務局便り
 茅風通信 30号



雪の藤原、朝日岳遠望

□お陰さまで10周年：お礼言上とご案内(事務局)・・・1
 ○2010年度の主な活動計画・日程
 ○古民家再生プロジェクト

◆10周年記念セミナー：報告(海老沢秀夫)・・・5
 吉原祥子「日本の水源林の危機！」

■特集：09年第7回講座「コモンズ村ふじわら」・・・6
 ○「カンジキで歩こう雪の上ノ原」に参加して(武田 賢)
 ○“かんじき”とコモンズ(竹内桂一)
 ○学生諸兄の感想とメッセージ(浦上 岩田 大嶺 鳥山 石原)
 ○さらちゃんが描いた銀世界(さら)

◆「会員・会友」便り ・・・9
 ○旅便り「パタゴニアを知っていますか？」(高橋志津子)
 ○連載『古民家再生奮闘記』②(北山郁人)

◆参加者募集のご案内(事務局)・・・11
 ○講座「コモンズ村・ふじわら」(5月15日・16日)
 ○東京楽習会「大好きな万葉集のスキに思う」(5月30日)

□編集後記～塾長のつぶやき～ ・・・14

■ お陰さまで10周年：お礼言上と今年度の事業計画・日程などのご案内 事務局

- 当塾は今年9月、発足10周年の節目を迎えることとなりました。これも一重に、陰に日に活動を支えて下さいました地元ならびにみなかみ町役場をはじめ、多くの会員・会友の皆さまのお陰でございませう。あらためて、幹事一同厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援ご指導をいただけますようお願い申し上げます。
- 昨年度はプレ10周年事業として、これまでの経験と成果を『多面的価値のある草原を持続的に保全する仕組みの構築』(地球環境基金助成事業)としてまとめました。当塾ホームページからダウンロード出来ますので、是非ご高覧くださいませ。
- 4月10日開催の会員総会で、今後の事業方針と新年度の活動計画・日程等が決定いたしましたので、以下ご案内申し上げます。

10周年、次の10年にむけて新たな一歩を

- ・何をするか：「水源地域の自然・環境資源を持続的に保全する仕組み」づくりの実践活動
- ・具体的には：①元・入会山(スキ草原とミズナラ林)の再生と活用
②古道の再生と活用(→フットパス)
③古民家の再生と活用(山村文化体験、教育旅行)
- ・どのように：①管理活動の徹底と利用の促進(→スキの新用途開発)
②新たな担い手の確保・老→壮→青(手をつなぐ)
・点→線→帯(流域コモンズの形成)
- ・合言葉は：『飲水思源』
- ・目指すは：地域のにぎわい→人と生き物が入り会うコモンズ村・ふじわら
- ・モットー：楽しみながら良い汗をかきましょう！

1. 2010年度の主な活動計画・日程 ・・・3頁ご参照
 それぞれの活動・イベントの参加者募集案内は開催予定日の1ヶ月前を目途にお届けします。面白そうなプログラムがないか、あらかじめチェックしていただき予定に入れておいてください。
2. 新規事業「古民家再生プロジェクト」のご案内 ・・・4頁ご参照
 空き家になっている古民家が集落のあちこちに見られます。そのまま放置しておく、人知れず雪に埋もれやがて土に還っていきます。これを、持ち主の許可を得て再生し、農村文化体験や教育旅行の受け皿として活用しようというプロジェクトです。早稲田環境塾と協働して取り組みます。活動への参画を歓迎します。

3. 「志援（協賛）企業」キャンペーンが始まりました！

多面的価値を有する水源地域藤原の自然・文化・環境資源を、利根川上下流のみんなの公共的財産として大切に、その保全活動をみんなで支えようという運動です。昨年末から開始、この4月までに既にみなかみ町内の有力14社が協賛会員になってくださいました。各社（代表）のご芳名を謹んで下記ご報告し、お礼を申し上げる次第です。今後順次、利根沼田地区から下流域の市町村に向かい、最終的には河口の銚子までつなげて参ります。情報の提供などご支援のほど、よろしくお願ひいたします。

- ・金盛館せゝらぎ（須藤 温）・小荒井製菓（小荒井勝利）・だいこく館（鈴木幸久）・辰巳館（深津卓也）
 - ・サンバード（松本亨太）・しなだ（品田賢一）・谷川岳ロープウェイ（宇佐美正春）・東洋プロセス（原澤三智夫）・花しげ生花店（矢部 誠）・葉留日野山荘（高橋伸行）・檜の宿水上山荘（松本英也）
 - ・武尊山観光開発（雲越利雄）・水上高原リゾート200（小関正浩）・和風レストランしりん（鈴木二三男）
- < 50音順・敬省略 >

4. 森林塾青水「学生部」が誕生します！

- ・「山の口開け」と野焼きの4月24日、学生会員7名が草原デビューします。既に今年2月、「かんじき雪原トレッキング」に参加してくれた東京の学生諸兄が中心です。今後、野焼き、茅刈りのほか、主として「古民家再生プロジェクト」やストローベイル・ハウスづくりなどの新規事業に取り組んでいただく予定です。
- ・下記は代表の石原光訓さんの「学生部」発足の弁です。次代を担う若き獅子たちにエールをお願いします。

森林塾青水「学生部」発足にあたって 石原光訓（早稲田大学政治経済学部4年）

2009年12月。ある飲み会（私と清水さんは早稲田環境塾同期生。笑）の席で清水さんから森林塾青水に若手を呼び込みたいという要望を相談されたとき、私は気軽な気持ちで初見を口にした。「学生部でも作ればいいですよ」枠組みをつくって、少しずつでも若手活動を既成事実化して、受け入れ態勢を作ってしまう。ありがちな発想だと思ったが、清水さんはたいそうお喜びになり、とんとん拍子で話は進む。

森林塾青水の活動10周年に伴って、より一層の活動の活性化と交流の拡大が求められる中で、学生が地元で活動するとき、果たすことができる役割は、3つ。1つは、労働。若さを活かしてがんがん作業。2つは、発想。若い視点で活動を盛り上げる。3つは、浸透。利害関係を意識せず、調査研究という名目で活動の普及を後押し。1つめは、簡単。2つめを発揮させるためには3つめから入り、調査に裏打ちされた地元のニーズと学生が自らで頭を使って主体的に活動をするのだという雰囲気作りがあわせて必要。森林塾青水とみなかみ町藤原集落を取り巻く関係者分析、問題分析、目的分析を通して、いままで活動においてスポットが当たりづらかった藤原に住む住民一人ひとりに立脚した形で、活動を展開したい。

学生に限らず人が動くとき。それは楽しいとき、志への共感があるとき、将来への可能性をみたとき。森林塾青水と藤原の地は、この3つを満たしている。まず、あごを引いて関東の水源地で足元からはじめていきたい。



5. 今年度の執行体制をご紹介します。

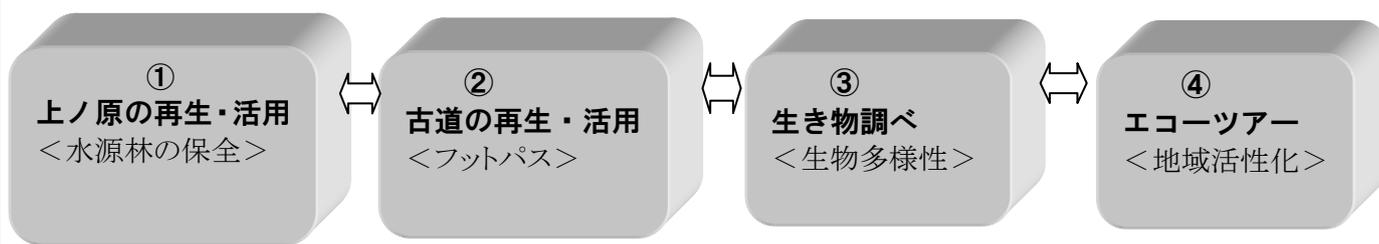
活動推進の裏方を務める幹事・監事の役割分担を明確にした業務推進体制としました。一同精一杯がんばります。ご支援ご指導のほど、よろしくお願ひいたします。

- | | | | |
|----|-------|---|--|
| 塾長 | 清水英毅 | ： | 全般統轄（地元・町役場・連携団体、「持続的保全の仕組み」づくり） |
| 塾頭 | 草野 洋 | ： | 統括補佐（事業統括～野焼き・茅刈り・フットパス、志援企業ネットワーク） |
| 幹事 | 浅川 潔 | ： | 企画・予算統括（事務局長～会員管理・コミュニケーション、10周年記念・助成事業） |
| | 稲 貴夫 | ： | 情宣・啓蒙（総会・セミナー・東京学習会・10周年記念補佐） |
| | 井上康之 | ： | 会員・広報（林野・農水・国土緑水） |
| | 海老沢秀夫 | ： | 学監（講座「コモンズ村ふじわら」、モニタリングサイト1000、草原再生ネットワーク） |
| | 岡田伊佐子 | ： | 婦人部代表（自然ふれあい学習、東京学習会、総会・セミナー） |
| | 北山郁人 | ： | 水上事務所長（フットパス、古民家再生、地元・若手ネットワーク、志援企業ネット補佐） |
| | 木村伸介 | ： | 行政（役場窓口・地元対応、古民家再生補佐、志援企業ネット補佐） |
| | 高野史郎 | ： | 学監（生き物調べ、自然ふれあい学習） |
| | 中島 武 | ： | 地元（カヤの活用、フットパス活用、地元若手ネットワーク、自然ふれあい学習） |
| | 湯本信康 | ： | 学監（自然ふれあい学習統括～麗澤中・川越小、生き物調べ） |
| 監事 | 林部良治 | ： | 会計（決算統括） |
| 若頭 | 石原光訓 | ： | 学生部統括（早稲田環境塾、古民家再生・ストローベイルハウス、事務局サポート） |

	講座「コモンズ村・ふじわら」	自然ふれあい学習 古民家再生 シンポ	摘要
4月 ～ 6月	① 4/24(土)～25(日) ・野焼き ・侵入木の除伐 ・次年度以降のゾーニング ・「山の口明け」セミナー ② 5/15(土)～16(日) ・フットパスづくり(芦ノ田峠①) ・春の生き物調べ ・外来種チェック&除去 ③ 6/19(土)～6/20(日) ・フットパスづくり(芦ノ田峠②) ・芦ノ田湿原現況チェック ・初夏の生き物調べ ・外来種チェック・除去	・5/22 麗澤中学(樹木観察会)	4/7(水) 幹事会 4/10(土) 総会 セミナー 5/6(水) 幹事会 5/30 学習会① 6/2(水) 幹事会 6/27(日) 武尊山山開き
7月 ～ 9月	④ 9/18(土)～19(日) ・ミズナラ林の管理方針策定&観察路整備 ・上ノ原：晩夏の生き物調べ ・その他：寺山峠・熊穴源流遡行(?)	・7/22 川越小(里山探検) ・7/21 麗澤中学(水源の森FS)	7/7(水) 幹事会 7/25 学習会② 8/17 諏訪神社祭り 8/20 藤原区民祭 9/1(水) 幹事会 9/26 学習会③
10月 ～ 12月	⑤ 10/23(土)～24(日) ・茅刈り講習会・検定 ⑥ 10/25(月)～29(金) ・茅刈り(平日プラン) ・秋の生き物調べ ⑦ 11/13(土)～14(日) ・茅刈りと茅の運び出し ・「山の口終い」セレモニー	10/23(土) 10周年記念シンポジウム	10/6(水) 幹事会 11/4(水) 幹事会 12/8(水) 幹事会
1月 ～ 3月	⑧ 2/19(土)～20(日) ・かんじき雪原トレッキング ・かまくらづくり ・地域の食文化の学び(ポタづくり)		1/12(水) 幹事会 2/9(水) 幹事会 3/9(水) 幹事会

古民家再生プロジェクト

『飲水思源』の実践 = 原風景と生態系サービスを大切にする ⇒ 流域コモンズの形成



失われていく人間本来の暮らしの継承 古民家再生プロジェクト

谷川岳、武尊山、平ヶ岳、巻機山、至仏山の5つの百名山に囲まれた豪雪の地、藤原郷。
 ここは奥州藤原氏の落人伝説をはじめ、数々の歴史を今に伝える奥里山、自然と文化の宝庫です。
 そんな日本人の心のふる里のような集落で、人知れず消えていく古民家と人々の暮らしを再生するプロジェクトです。早稲田環境塾とのJV（協働事業）として取り組みます。

古民家には、自然と共に生きてきた人類の歴史と知恵が詰まっている。

遠い過去から現在に受け継がれる大切なものが今まさに失われようとしている。完全に身の周りの自然素材だけで作られた古民家は、一度失われれば、もう二度と再生することは不可能である。お金をかければ、同じようなものは作ることは可能かもしれないが、暮らしに根付いた本物の空間を再生することはできない。人類の歴史と直結した古民家は、まさに人類全体の宝といえる。

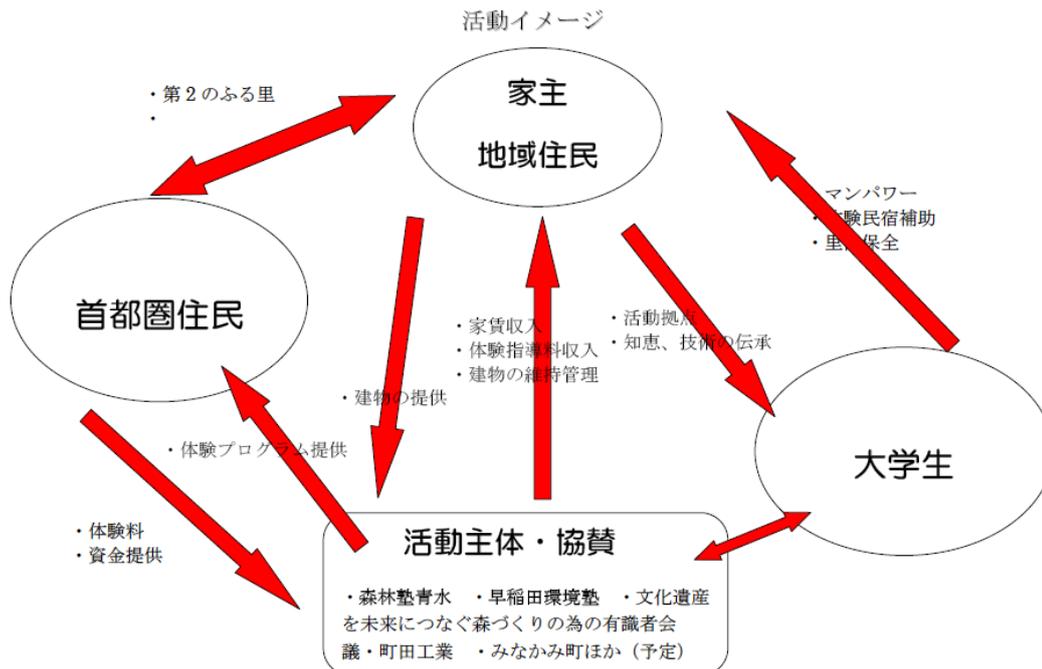


雪の多い藤原エリアでは、人が住まなくなり放置されると、すぐに家が傷み、雪の重みで押し潰されてしまう。そして、人知れず、自然に溶け込むように土に還ってゆく。
 このプロジェクトでは、このような運命にある古民家を一軒でも多く後世に残すと同時に、山村文化全体の継承と、そこからの学びを通じ、次の時代を生き残るための新しいライフスタイルを提案し、実践してゆく。

古民家再生プロジェクト活動イメージ

～空家の古民家を借り、再生して山村文化体験民宿を運営する～

- 1、古民家の状況調査（戸数、状態、所有者など）
- 2、状態により、優先順位をつける
- 3、所有者との契約（賃貸、売買、提供）農地もあれば、合わせて借りる。
- 4、内部の詳しい調査。必要があればリフォーム。可能な限り、自然素材を用いる。
 （古民家再生体験プログラムとして、学生や首都圏住民と協働で作業を行う）
- 5、簡易宿所営業の許可申請
- 6、山村文化体験民宿オープン
 （地域住民と協力し、様々な体験プログラムを提供）
- 7、順次、軒数を増やす。



◆10周年記念セミナー:報告 「日本の水源林の危機！」

海老沢秀夫

4月10日の総会に東京財団政策研究部の吉原祥子さんを講師としてお招きし、「グローバル化する国土資源と土地制度の盲点」と題してご講演をいただいた。土地、森林、水という国土資源は国の基盤をなす重要な自然系インフラなのに、それに対する日本の施策や制度はあまりにもおそまつではないか。国土の基本情報としての地籍の確定、適切な管理・利用者の手にわたるような公開性の高い林地売買のルールづくりを急ぐべきだと吉原さん。利根川の源流部で21%の森林と草原を管理する森林塾青水にとって、これからも適切な管理者でありつづけることがいかに大切かを、改めて考えさせられる話だった。概要を報告する。

■「水源林を買いたい」うわさは本当か

「最近、山林売買への関心が高まっている」といううわさが各地の林業関係者の中でささやかれている。もしそれが本当なら、水資源の涵養に重要な役割を果たしている水源林が、無秩序な売買によって危くなるのではないか。そんな問題意識から実態調査のプロジェクトを立ち上げた。国交省のデータでは確かに、山間部での土地取引面積は、過去10年間で倍増している。しかし、具体的な売買事例になると、いくら調べても実態がつかめない。

なぜ具体的なことが分からないのだろうか。分からないこと自体が問題ではないか。理由は大きくふたつあった。

ひとつは日本の山林売買が慣習的で不透明だということ。売り手と買い手さえ合意すれば公にならずに取引が成立してしまう。

もうひとつは土地制度の問題だ。具体的には3つある。

1点目は、日本では基本的な国土情報のひとつである地籍の確定が不完全なこと。全国で48%しか調査が済んでいない。山林部分にいたっては6割が未確定だ。これは先進国では異例なこと、たとえばドイツやフランスでは国防上の重要性もあり、100%地籍調査が完了している。

2点目は国土利用計画法。2000年の地方分権法以降、土地売買は都道府県への届け出制になったが、それが正確なのかどうか、無届けの実態はどうかなど、国はまったく把握していない。先ほどの国交省のデータも、実はそういうあやふやなものなのだ。

3点目は、日本の土地所有権の強さ。欧米では土地の最終処分権や優先的領有権を政府が持つのに、日本では公権に対抗できるほど強力だ。またアジアでは、外国人や外国法人の土地所有に対して地域を限定したり、事前許可制としたりして制限している国が多い。欧米では、国益を損なうような外国資本の参入などに対して公的に介入できる法制度がある。しかし日本は、そうした国土資源を守るための規制やルールがまったく手薄だ。

■ 土地・森林・水はだれのものか ルールの整備を

こうした状況の中でもし山林売買が加速していくとすれば、それが日本人であろうがなかろうが、不適切な管理・利用をする人に山が渡って問題が起きて、われわれは制度として守るべきがない。そこで、私たちは柱を2つ立てて政策提言をおこなった。

ひとつは「水源林保全」をはかるための視点。「土(林地)」「緑(立木)」「水(地下水)」という観点から考えた。

「土(林地)」を守るために必要なのは、第一は「地籍の確定」だ。多大な労力と時間がかかることなので、たとえば「ここは重要な水源地であろう」といった大きな境界を確定するなど、優先順位を決めて地籍調査を完了したい。第二は「林地市場の公開化」。山林ブローカーの暗躍を許さないようなオープンな市場を創設したい。そうすることで、山林価格の適正化、適正な管理者へ森林が渡っていくような市場ができるだろう。第三に、国土利用計画法による「売買規制と公有林化」も、重要水源地を守る最終手段として考えたい。これは現在の法律を広義に解釈することで対応できる。

「緑(立木)」を守る一。つまり、林業再生だ。単年度制で複雑な現在の補助金制度を、複数年で使えるものにする。また、適正な管理者へ林地が渡るように保有税を上げる、あるいは譲渡税を軽減するといった柔軟な税制、補助金の再編が必要だ。

そして「水(地下水)」を守ること。現在、地下水を利用する権利は土地所有者に帰属しているが、水は基本的に公共財であると考えたい。「私水」から「公水」へ。これまでの認識を改めたい。

■ 自然系インフラ 管理体系の戦略的再編を

提言の大きな柱の2つ目は、「国土資源保全のための総合的課題」。

まず、上下水道などハードなインフラ、森林といった自然系のインフラを含め、日本の資源を一度、総合的に調査し、見直してみる必要があるのではないか。そして、一級河川は国交省、地下水は厚生労働省、山は林野庁といった資源管理体系を改め、再編を図りたい。

また、そうした資源をどう利用していくのか。住民が計画段階から参加し、合意形成をめざす戦略的な計画アセスメントを導入したい。

そしていちばん重要なのが、その土地にずっと住みたい、ムラを捨てたくないと思えるような社会環境をどう創っていくかだ。それは、法制度や政策の整備という国レベルの話と同時に、われわれ自身がどう暮らすのかという社会のルールを新しく創ることにほかならない。都市住民を含め、われわれ一人ひとりがそれぞれの立場で、土・緑・水を利用し保全していくことにどうかかわっていくのか、具体的に実践していくのかを、いままさに考えなければいけない。

これは山に限った話ではない。都市の空き家だったり、離島だったり、過疎地だったり、日本全国で起こっている同じような状況、つまりだれが所有しているのかわからない、この先だれがどう管理していくのかわからないという土地が増えていくなかで、今回の山の問題は、今後の日本の社会の根本的な住み方、あり方への大きな問題提起ではないだろうか。



■ 特集：第7回講座「コモンズ村・ふじわら」
—カンジキで歩こう雪の上ノ原—

毎年大好評のカンジキ雪原トレッキングと郷土食「ぼた」づくり。今年も2月13日～14日、老若男女20人が参加。雪原の動物の足跡ウオッチングや巨大かまくら造りを楽しみました。惣一郎先生と民宿「樹林」の皆さま、二日間お世話さまでした。(編集子)



◆「カンジキで歩こう 雪の上ノ原」に参加して

武田 賢

故郷“奥飛騨”を元気づけようと企む同郷の山仲間3人で参加の武田さん。どんなヒントを得られたのでしょうか？(編集子)



2008年9月の「寺山峠と雨呼山」に参加させて頂いて以来、東京での総会と学習会を含めて森林塾は4回目の参加です。今回は故里を元気付けようと企む同郷の友人とその山仲間という3人での体験でした。我が故里“奥飛騨”は藤原に負けず劣らずの豪雪地ですから雪には慣れています。アラコキ(古希前後)の体力に初日のカンジキ登山はこたえました。

さて故里飛騨市「山之村」は標高1000mほどの山上盆地に7集落、1000人余の人口がありました。今は200人弱の過疎集落です。昔は一間廊下を廻らせた豪壮な農家や板倉、美しい茅原などが点在し、山村の労苦を知らない子供には山上の別天地とも思える山里でした。そして今、人気の絶えた集落は丈余の雪に埋もれ、残った人々は高齢化と過疎に苛まれています。

昨年1月、その山之村が岐阜県で唯一「にほんの里100選」に選ばれました。地元の反応は歓迎と様子見が半々でしょうか？推薦人の私は、これが地域起しの機会になればと地元紙に二つの可能性を提案として投稿しました。一つは山の暮らしを支えてきた“循環や持続”の生活は今の時代にこそ必要な指標と考えて「集落全体を“山村博物館”に見立てた地域活動」の立ち上げです。二つ目は山之村が北アルプスの飛騨側にあつて雄大な山岳展望を指呼の間にする事から「山村風景と山岳展望を楽しむフットパス」の開削でした。この地にはかつて鎌倉街道が通じ、近縁には遊行僧円空の鉦彫り仏を安置する仏寺も点在することから、地元人をガイドにした“奥飛騨ウォーキング”の中継地としての可能性もありました。

この地元紙への投稿が縁で今回同行した上平隆憲さんと知り合いました。彼は山之村出身の在京者で、故里起しの熱を地元の古文書解読で放下していました。そこにもう一人、日本橋で税理士を営む同郷者が加わりました。この在京の同郷三人が鳩首した結果が今回のコモンズ参加に繋がりました。コモンズの活動の一つ一つが、私たちが山之村で起したい活動に重なります。殊に茅原の野焼きは、山之村では途絶したワラビ田の復活に欠かせない仕事です。その野焼きの打合せがあると聞いては…。また雪の山岳展望を楽しむ春山のフットパス経験にも…。

夕食後のミーティングはさらに羨ましく、そして勉強になりました。会員の方々に混じった地元の皆さん、行政や業者の方々、さらに学生部の若者たち。夫々の立場で忌憚のない意見や提案、古民家再生プロジェクト、ツリーハウス作りの企画などなど。これからの我らの道のりを思うと遥かなる道程です。森林塾青水は発足10周年との事、私たちの今年がどんな形でスタート出来るのか？いずれご報告を兼ねてコモンズを再訪させていただく時、少しでも話題を提供できるような活動を始めなければと、強く念じております。今回の参加を快諾いただきました皆様に感謝申し上げますとともに、森林塾青水の活動のさらなるご発展を祈っております。

◆“かんじき”とコモンズ

竹内桂一

行田市議会議員にして早稲田環境塾生。見かけは上州のアラウンドロン風(失礼?)ですが、実は筋金入りの登山家です！(編集子)

みなかみ町藤原で“かんじき”を付けての雪上トレッキングをした。低山ではあつたが、すがすがしい冷気を佩びて、雪上を闊歩する時間は実に贅沢であつた。

ところで、私の“かんじき”はベルト式アルミ製で簡単に着けることができるが、他の参加者が使用するものは昔ながらの木製で一本の縄で縛るものである。出発する前に、民宿のご主人が“かんじき”の着け方の指導をしていた。傍で見えていたが、理に適っていて実に効果的な縛り方であると感心した。

“かんじき”とは、かつては豪雪地域の住民が山林労務や狩猟に使用していたものであり、自らの知恵で生きてい

くために作り使用したものと理解している。ネットで調べてみると、“かんじき”の材料や形などは地域によってまちまちである。ここ藤原では、“アブラチャン”という木で作るが、中には“クロモジ”(飛騨)の木や“とねりこ”(新潟)の木で作る地域もあるようだ。形も楕円形のものもあれば丸いものもある。輪が全体的に雪上に接しているものもあれば、つま先が少し上向いているものもあり、縄の張り方も様々である。

「たかが“かんじき”、されど“かんじき”」と世間でよく言われる言い回しだが、そこには先人たちの英知が凝縮し、永く言い伝えられてきた一つの伝承文化である、ということを感じざるを得ない。“かんじき”だけに限られたことではないが、こういう知恵と技術や地域の言い伝えなどを伝承していくことは、コミュニティにとって大切なことである。今回の森林塾青水のテーマ「コモンズふじわら」、この表題を物語っているようだ。都会の人たちとの盛んな交流は、地元の人たちに誇りと自信を植え付け、“コモンズ”という仕組みの広がりにつなげていくことだろう。

帰りぎわに公共の温泉“上牧風和の湯”に立ち寄った。無色透明で泉質はアルカリ性である。鉱物元素の詳細な分析は分らないが、実にいい温泉で身体芯まで温まった。そこから数分のところにJR上牧駅があったため、冬景色の山並みを観ながら鈍行で帰路に着いた。

森林塾青水の塾長清水氏を始め塾の皆さんのご好意で、今回の雪上トレッキングに参加させていただいた。文字にはしていないが、地元の人々の苦悩、洞窟氷洵、“ぼた”という郷土料理など貴重な教授もさせていただいた。心から感謝、感謝である。



◆学生部諸兄の感想とメッセージ 浦上卓司・岩田純平
大嶺隆純・鳥山絵美里・石原光訓

当塾「学生部」の中核を担うであろう5人の若者。フィールドの下見をかねてカンジキ雪原トレッキングと「ぼた」づくりに挑戦。それぞれに、新鮮な感じをもたれました。(編集子)

森林塾青水のみなさんへ

浦上卓司

まず、他の場所や団体では体験できないトレッキングや「ぼた」づくりをさせていただきまして、本当に楽しかったです。ありがとうございました。

森林塾学生部と本部(?)の関係について個人的な所存。何か活動があるたびに呼んで欲しいです。さら

に言えば、活動がなくとも、ちょっと東京で集まれそうなきや他のイベントにかこつけて出来る限り会う頻度を増やしたいです。

なぜならば。活動の概要や予定はなんとなく把握できたのですが、森林塾青水の人々がどのような人で、何を目論んでいるのかがわからないためです。古民家を再生し、茅場を作り維持し、出来る限り生物多様性も護り…その目的は「社会に貢献すること」でしょうか？すると「社会に貢献」は何を意味するのでしょうか？申し訳ないのですが、例えばこのような基礎的な部分の理解が出来ていないのです。出来る限り共に活動し、もっと話し合いの場を持ちたい理由はそこにあります。特に古民家再生プロジェクトには全ての行程に関わってゆきたいです。建築学科だから建物関連を、なんて棲み分けに甘んじるつもりは毛頭ありません。よろしくお願いたします。



視野が広い！！

岩田純平

2日間という短い時間でしたが、初体験のことばかりでした。積雪の多さから始まりスノーシュー・郷土食作りなどなど…。今回参加した理由は2つありました。単純に大雪を見てみたいということ。もう一つが関東の水がめである利根川の水源を見てみたいということ。大雪の方は十分すぎるくらい満喫できお腹が一杯という感じです。また、水源の方も森の中の散策や青水会の方の説明を聞くことで生の声として大変面白かったです。しかし、一番驚いたところは青水会の方々のバックグラウンド(職業という意味で)の幅の広さです。特に夜の懇親会では、その幅の広さが話の深さに比例しているのでは？と感じてしまうほどでした。鎌倉街道の話はとくに印象に残っています。そして、それぞれの方の視野の広さにも脱帽でした。10年・20年・50年後…の日本をはっきり自分の頭の中に描いてそれを実現しようとする勢いが話ににじみ出ていました。私にとって一番欠けている視野でもあるのでとても刺激を受けました。次回皆さんにお会いする時には、視野を少し広げた姿をお見せすることができればと考えています。

2日間でしたが関係者の皆さまにはとても感謝しております。ありがとうございました。



僕の中で感じた衝撃

大嶺隆純

僕は正直、何か目的意識を持って今回の研修に参加したわけではありませんでした。

みなかみについても知りませんでしたし、森林塾の青年部のメンバーに加入することも当然知りませんでした。そんな状況の中でも、今回の研修に参加してよかったと思えた理由がありますので、それについて書かせていただきたいと思います。

森林塾の会合が非常に密度の濃い内容だったということです。僕は大学に入ってから寮やサークルなどある程度の議論や会話をしてきたつもりでしたが、森林塾の会合ほど、明確で内容の濃い話し合いは初めてでした。自分の両親以上の年齢の方々があそこまで自分の理想に向かって語っている姿は、僕の中で衝撃でした。あまり発言ができなかったのが残念でしたが、それはまた次の機会にとっておきたいと思います。

今回は本当にありがとうございました。ストローベイルハウスの件でまた何かとお世話になるかと思いますが、そのときはよろしくお願いします。



自然に手を入れる責任

鳥山絵美里

現地に着いてまず感動したのが一面の雪野原でした。ススキが雪の下に埋まっているとはとても想像つかないくらい真っ白で驚きました。人が手を入れないと壊れてしまう自然と聞いていましたが想像より遥かに広く、大変な作

業なんだと痛感しました。

また、雪の中から出ている植物や動物の足跡も興味深かったです。この寒い環境でずっと室外にいる、動植物の生命力の強さには驚くばかりです。この場所に住んでいる生物がいるんだと実感することで、自然に手を入れる責任も強く感じました。また自分達の活動で環境がどのように変化するかを調べることも大切なんだと改めて感じました。私の所属する思惟の森の会でもそういった意識を持って活動していきたいです。雪の下にはどんな風景があるのか、冬以外季節にもまた来たいです。

参加者の皆さんには雪でずぶ濡れの私を大変気遣って頂き大変お世話になりました。人の温かさを感じることができ、人見知りをする私でもすんなり馴染めてとても居心地がよかったです。本当にありがとうございました。

あと学生部としては、定期的に新たな学生に参加してもらうのが良いのではないのでしょうか…？例えば学生募集定員3名みたいな、やっぱり外から人を入れることは大切だと思います。ただ、今回自分で実感したのは、慣れない人のフォローが結構大変なので、募集は少数が良いのではと思いました。



感想と展望

石原光訓

一面に広がる白の世界。秋に訪れているが故、ここが一面の茅野原であったことは知っている。けれども、ここまでその気色を感じさせないとは。これだけの雪が積もり、それが春には解ける。解けては茅野原や山や森に染み渡り、蓄えられる。自然のダムのように大きいことか。もし雪がすべて一瞬で解けて水になったら。上毛高原は水浸しかもしれない。そう考えてみると当たり前の自然の摂理は多くの生き物を支え活かしているという実感を抱くに至った。大雪が降るから、都市は生かされている。秋の茅刈りから連続する季節の感覚を持ち、改めて飲水思源の神妙さに肉薄した。数多くの主体が藤原と森林塾に注目し、参画し始めている。藤原は学生にとってどのような表現の場となりえるのか。地元の人たちの生活という原点を念頭に、調査・研究・創作・企画・関係構築など様々な切り口から地に足のついた活動を検討し、展開していきたい。

◆さらちゃんが描いた思い出の銀世界 さら
 ススキ草原の妖精さらちゃんは冬になると雪の精に
 変身します！ 対話できるかな・・・。(編集子)



さらちゃんワールドです！



PATAGONIA ARGENTINA Glaciar Perito Moreno
—氷河—

この写真のような大氷河がいくつもあります。これはモレノ氷河と言いい5km、高さ70~80m(水中に100m)、全長30km。氷河が崩落すると、雷がいくつも落ちたような身体が震えるような大音響です。しかし、音が響いた時は崩落した後ですから瞬間はなかなか見られません。私は1日の間に何回か見られ、とてもラッキーでした。温暖化の影響でしょうか、ここ数年、崩落が多くなっているそうです。観光客にとっては嬉しいことです。流れ出た氷山を船で間近に見ると、高さ10m位ですが巨大さに圧倒されます。

この付近には南極ブナがあります。葉は小さく固く、幹は直径10~15cm、何本かに分かれ桜の若木に似て艶があります。



ブナの木

◆「会員・会友」便り

◆旅便り「パタゴニアを知ってますか？」 高橋志津子

この2月、夏本番のパタゴニアに行ってきた。大氷河、そして彼の国にもブナがあるそうです。(編集子)

パタゴニアとは・・・。
 1520年マゼランが大西洋を南下し南米を探検している時に、先住民がグアナコという動物(顔はラクダ、体は鹿)の皮で作った靴をはいていて、それを大足「パタゴン」と呼び、パタゴンの国「パタゴニア」となりました。南緯40度のアルゼンチン・コロラド川からマゼラン海峡までの、アンデス



山脈をはさんだチリ・アルゼンチンの広範囲を指し、面積は日本の3倍あり世界遺産に登録されています。『最果ての地・パタゴニア縦断と緑の魔境ギアナ高地』夏本番の2月の旅です。

—パイン国立公園—

パタゴニアは「風の大地」とも言われ、非常に強い風がいつも吹いています。南米のスイスと称されるパイン国立公園をハイキング。晴天でも風が吹くと湖が波立ち、にわか雨のように降ってきます。切り立った山々がそびえ(剣岳にそっくりな山がありました)、花々が咲きほこっています。夏です、スキー用ヤッケを着て往復3時間歩いても汗が出ません。午後氷山の氷でオンザロックをすべく違う場所を3時間ハイキング。ここはもっと寒く、ジュースだけ飲んで鼻水をすすりながら車に乗りこみました。

午前の湖畔で目をひいた花が2つ。ホテイランの一種で長さ2cmの楕円、オレンジ色 2/3 に白と茶が残り横に2等分した「乙女のスリッパ」。黄色で同じく長さ2cmの楕円「木靴」です。

—マゼラン海峡を渡る—

1520年11月28日、マゼランが大西洋から太平洋に出る海峡を発見したマゼラン海峡を渡り、南米の最南端

の町ウシュアイアに到着。南極はもうすぐそこです。魚が豊富で、夕食は楽しみにしていたカニです(キングクラブカニ)。4人で1杯(匹?)。日本で昔用いていた「さおばかり」のようなもので計り、ボイル。身は柔らかくほっくりしていて、おいしいこと、おいしいこと。全員無口、満腹！満足！

ここにも、南極ブナがあります。「中国のランプ」「おじいさんのヒゲ(サルオガセもどき)」という寄生植物、木や枝に直径2~3cmの黄色がかかったベージュの食用きのこがかっついていて面白いものがありました。そして、キツネ、ウサギがそのへんに普通にいます。氷河が削りとった巨大なお椀のような大地をえんえんと通り、地球の営みを感じます。

一緑の魔境・ギアナ高地一

テレビで数回放映されたギアナ高地に足を運びました。数億年前の地球を、大地を、感じ、高さ 997mの滝「エンジェルホール」をセスナで見ました。ギアナの標高 2700mの台地で、ここにしかないという水かきのないカエル(オリオネラ)を手に乗せましたが、埼玉のアオガエルと同じで、オシッコをひっかけられました。

セスナやヘリコプターに乗るのは天気次第。ボートでクルージングするのも水次第。川で泳ぎ、滝をくぐり、川原で寝ころび、林に分け入り、『時間はあっても、時刻がない』そんなギアナ高地です。(了)

◆古民家再生奮闘記 その②

北山郁人

北山ファミリーが昨年4月、藤原に移住しました。築百年を超える茅葺き古民家です。移住の準備作業、それは創造をはるかに超える大仕事になりました。(編集子)

この家には2階もありました。前の借主が小部屋をいくつか作っていましたが、その上に無理やり押し上げられていたのが、古い農機具などです。杵や臼、木桶に脱穀機、昔の生活を偲ばせるお宝が、わんさかできてきました。2階はこれらの道具を、陳列できるようなスペースと多目的なスペースにすることにしました。もちろん、屋根裏のすすけた茅は丸見えにしたままで。でも、まずは生活の場である1階をなんとかしてからです！

さて、床をはがし始め、なぞの菌類に驚きましたが問題はそれ以上でした。柱は丸石を基礎にしてたっていましたが、明かに大きく傾いていました。引き戸も動かないほど…。床下は隙間から入り込んだ堆積物で、柱の根元はすっかり埋もれて朽ちかけていました。宙に浮いているのか?!と思うほど柱自体もシロアリなどにやられスカスカのところもありました。まずは、堆積物を全て掻きだし柱を直す！家族総出の作業となりました。そして、梁をジャッキアップして、傾いた柱を直していきました。床板を剥いで見ると、昔の人の手仕事の巧みさにも感心しました。曲がった木を見事に組み合わせ、ほぞを作ってつなぐその技に、思わず取り除くのをためらったほどでした。また、囲炉裏跡もたくさんできてきました。この囲炉裏で、暖をとり食事をし、豪雪のこの地を生きてきた証です。作業を始めたのは、夏真っ盛りの八月。朝晩は冷え込みますが日中、子どもたちは水遊びをするほど。作業時の滞在にはテン

トを使っていましたが、秋の気配も感じられ、4畳半ほどの台所に隣接する小部屋で生活することにしました。この部屋にも囲炉裏裏がありました。こたつの板をのせ、子どもたちがいたずらをしないよう、火を入れることはありませんでした。でもやはり、この家には囲炉裏が似合うのでどこかに復活させたい。そう思いました。



結局、柱は16本も直しました。朽ちた箇所を切り取り、コンクリートで基礎を上げて柱を支えたり、組み木のようにはめ込んで直したり。1本丸々挿げ替えもしました。そこにはやはり古材を使いたい。ちょうど近くに解体した古民家があり、柱はそこから頂戴することが出来ました。削れば生々しい木の香りがする立派な栗の柱は玄関脇に、珍しい朴の柱は部屋の中央に使いました。この柱には、後に古道具屋で購入したねじ巻き式の古時計を掲げました。これがよく似合う！



はがした床下の壁は薄いとタン1枚。ここには断熱材として古畳を使うことにしました。町内の畳屋さんが古畳をわけてくれたので、通風口を残し断熱にしました。いずれ建物全体を覆う外断熱にも古畳を使用するつもりです。

寒さ対策として取り組んだもうひとつが床暖房。薪ボイラーで沸かしたお湯を家中の地中に埋め込んだホースに循環させ、地面を直接暖める方法です。しかし長さ 240m、とても硬いこのホースがクセ者で、渦を描くようにうまく埋め込むのにかかなりの苦戦！子どもたちが寝ている間に一気に仕上げようとしたのですが、何度となくホースがからまり、よじれ、渦を描くことが出来ない。夜中の道路にホースを一直線に伸ばしてよじれをとり、地面を掘っては埋める…結局妻と2人で徹夜となりました。



建物中央の外には、どうやってここまで運んだのか、かなり大きな平らな石がで〜んと横たわっていて、土間側ではなくここを玄関としました。床下からは、平らな石がいくつかでてきていたので、これらは玄関内側に埋め込み敷石にしました。できるだけお金をかけず、そこにあるもの土地のものを使おう。古いものも有効に使おう！そんな北山家の作業が続きます…。

◆ 参加者募集のご案内

第2回講座「コモンズ村・ふじわら」

第2回 上ノ原「入会の森」の生き物調べと芦ノ田峠のフットパス地図づくり

森林塾青水では、元・入会山だったススキ草原やミズナラ林、峠の古道など地域の自然資源や文化資源の再生と活用に取り組んでいます。講座「コモンズ村・ふじわら」は、その実践プログラムです。7年目の今年は、これまでの経験と成果をふまえ、フィールドを持続的に管理・利用していく仕組みや方法を実践していきます。今年度2回目の今回は、草原の生き物調べと外来種対策、そして芦ノ田峠をフットパスとして利用するための地図づくりに着手します。参加者を募集します。



芦ノ田峠のサワギキョウ

- 日程 5月15日(土)～16日(日)
- 集合 初日の10時20分、JR上毛高原駅改札口
〈上越新幹線〉東京 8:52—上野 8:58—大宮 9:18—高崎 9:52—上毛高原駅 10:14
- 参加費 10,000円(森林塾青水正会員は9,000円、学生会員は7,000円)
※宿泊費、食費(夕食・朝食・昼食)、保険代などを含みます。初日の昼食は各自持参して下さい。現地までの交通費は自己負担です
- 宿泊 民宿「とんち」/群馬県みなかみ町藤原3534-1(0278-75-2337)
- 服装など 野外活動に適した服装(長袖、長ズボン、軍手など)。その他、水筒、雨具、カメラなど
- 申し込み・問い合わせ 森林塾青水事務局・コミュニティデザイン(浅川潔)/東京都中央区湊1-2-3プロスペリテハ丁堀301【電話】03-6228-3503、【ファクス】03-6228-3504、
【メール】info@commonf.net
- 当日・緊急連絡先 草野携帯(090-3390-8406)/清水携帯(090-3575-2283)

締切日4月30日

第1日目 5月15日(土)

時刻	内 容	備 考
10:20	上毛高原駅集合	
11:00	上ノ原「入会の森」～野焼き後の草原の観察、除伐など	
12:00	昼食・休憩(弁当は各自ご持参下さい)	
13:00	芦ノ田峠のフットパス歩きと地図づくり(ルート確定)	藤原案内人クラブ
16:30	民宿へ	民宿「とんち」
18:00	夕食～交流会	

第2日目 5月16日(日)

時刻	内 容	備 考
7:00	朝食	
8:30	草原の生き物調べと外来種チェック&対策	
12:00	昼食	レストラン「幸新」
13:30	解散 → たにがわ416(15:19上毛高原駅発)	

送信先

E-MAIL : info@commonf.net

FAX : 03-6228-3504

コミュニティデザイン気付 森林塾青水事務局

参加申込書

第2回フィールドステイに (右記のどちらかに○印してください)	参加します		欠席します			
お名前						
ご住所						
E-MAIL 連絡先						
下記に○印を付けてください						
○印を付けてください	月日	朝食	昼食	夕食	宿泊	交通手段
	5月15日(土)	/	/			自家用車 電車 (上毛高原駅 ・ 水上駅)
	5月16日(日)			/	/	
通信欄						

第一回東京「楽習会」のお知らせ 「大好きな万葉集のススキに思う」

本年度第一回目の楽習会は岡田幹事を講師に下記の通り開催いたします。

「万葉集」は七世紀から八世紀にかけて編纂された日本最古の和歌集です。天皇から庶民にいたるまで、様々な人々が詠んだ和歌、約四千五百首が納められていますが、ススキなどの森林塾の活動にゆかりの深い植物もたくさん登場します。万葉人とそれらの植物との関わりなどについて、岡田幹事からお話をいただき、楽しく学んでゆきたいと思えます。

また、森林塾青水の今年の活動等について、清水塾長より報告いたします。

1、日時 5月30日(日) <旧暦 4月17日>

開場 9時半

開講 10時~12時

1、場所 中央区湊1-1-1「女性センターブーケ21」研修室

JR・東京メトロ八丁堀駅下車 B3(京葉線)・A2(日比谷線)出口より

徒歩3分 桜川保育園まえ <<案内図参照>>

当日連絡先090-9292-6781(担当幹事 稲)

1、テーマ

① 「大好きな万葉集のススキに思う」・・・講師 岡田伊佐子(幹事)

“万葉の時代から今も生き続けているススキ、オモイグサなど、
万葉人にかえて懐かしんでみませんか”(岡田講師より)

② 森林塾青水・今年の活動・・・報告 清水 英毅(塾長)

③ その他

1、参加費 無料

1、懇親会 閉会后 自由参加 場所未定

1、参加申込 お名前、連絡先を明記の上、ファックスまたはメールにて下記事務局まで御連絡下さい。

宛先 FAX 03-6228-3504

メール info@commonf.net

案内図



○我家の庭はレンゲ畑とムギ畑 我が家にも、かつては小生丹精の和風小庭があった。今は家内の手になるレンゲとムギとブルーベリーの畑になっている。でも、嘆くことはない。以前も今も、生き物たちでにぎわう楽園であることに変わりはない。今日は4月20日穀雨。レンゲの花にはハチが飛び交っていた。ムギの葉にはアブラムシが群がり、それにアリとテントウムシがたかっていた。小さな生き物たちの命のつながり。日がな一日眺めてあきることのない楽しい世界。今も我が小庭(畑!)は、小生にとってかけがえのない元気の源だ。



レンゲ畑とムギ畑の奥がブルーベリー畑

○上ノ原の生物多様性 上ノ原の生き物たちのにぎわいは我が小庭の比ではない。なんたって、こっちは町中の猫の額、あちらは21町歩もある大自然。調べたら、ものすごい数と種類の生き物たちの命のつながりがあることが分かってきた。いわゆる生物多様性の豊かな癒しの森。重要伝建の茅葺材供給のほか、水源の涵養、温暖化緩和、自然ふれあい学習の場、原風景の保全といったいろんな働きをしている。

○上ノ原の経済的価値 それらをひっくるめて生態系サービスというらしい。「一体なんぼのものやねん」とコンサルタントに試算してもらったら、固めにみておよそ50百万円(年)ときた。10年なら5億円か。どれだけの値打ちがあるのか見当つけがたいが、40年以上も地目「原野」として放置されてきた土地であることを思えば、その今日的価値は大変なものなのかも。問題は、これを末長く持続的に保全し地域の活性化にどうつなげるかだ。

○流域コモンズという考え方 昔、上ノ原は地域の入会山だった。茅場も薪炭林も利用の必要がなくなって、ゴルフ場やスキー場に化けたり森林化していった。今日的価値に気付いても、今や過疎高齢化の極みにあって再生も管理もままならない。藤原だけが例外ではない。日本中の山間地や奥里山が地域の人たちだけでは支えられなくなっている。「日本の水

源林の危機!」といった警鐘がならされる背景がここにある。今日的な経済価値や金銭では計り知れない文化的価値を認めるなら、都市部なかんづく水源地域の恩恵を被る流域市民をふくむ日本社会全体の問題と考えるべきではないか。この自然・文化・環境資源(生態系サービス)を流域住民の公益的財産(コモンズ)と位置付け皆で守り支える。それが流域コモンズの枠組みだ。

○つなげる、つなぐ、つながる 上ノ原のカヤをブルーベリーのマルチ材として使ってみたくてくれる有機栽培果樹園が出てきた。そこで採れたブルーベリーをみなかみ町の旅館(当塾の協賛会員)に仕入れてもらう。こうして、カヤの利用を地域につなげ地域の会社同士をつなげる。森林塾青水「学生部」が誕生した。彼らや集落の若者たちに古老グループから野焼きや茅刈りのやり方を伝承してもらおう。つまり、老→壮→青とつなぐ。「飲水思源」を合言葉に流域コモンズの輪をひろげ活動に参加してもらい、地元衆とつながる。つまり、つなげる、つなぐ、つながる、の3Tが持続的保全システムの要諦だ。



生命のつながり

○明日のエコでは間に合わない この4月、みなかみ町は過疎法という過疎団体に指定された。同時に指定された孺恋村を含め東京の水がめ・群馬県では14市町村になる。そして、藤原集落は少子高齢化が顕著で限界集落入りも時間の問題といった状態。「明日のエコでは間に合わない」という。首都圏1200万人の生命の水のふるさと＝コモンズ村ふじわら。このかけがえのない公益的財産を皆で寄ってたかって支えあう「流域コモンズ」の形成を急ぐ所以である。

菜の花や雨奇晴好を旨とせん

(青)